
神は哀れな子羊に慈悲を与える

ハンバーグ派

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は哀れな子羊に慈悲を与える

【Nコード】

N9387W

【作者名】

ハンバーグ派

【あらすじ】

「魔術士と忘れし伝説」、「とある涙の召使い」の主人公、シズマ＝ラインズ。

とある理由で神に仕える彼が、次に飛んだ世界は「GS美神 極楽大作戦!!!」の世界だった。

彼の悲しみを救う為、シズマがその世界でなすべき事は一体……。

上記の2作品を読んでもらえれば、主人公情報はわかりますが、なければないで楽しめると思います。

主人公紹介を参照下さい。

駄文、週一位の投稿ペースになると思います。

第一章、昔々ある所に……。 (前書き)

召喚士シズマ∥ラインズシリーズ第二段です。

投稿ペースはかなり遅くなりますが、よろしくお願いします。

第一章、昔々ある所に……。

無の空間。

必要なものは考えるだけで出現する、神の住居。

そんな所に、とある理由でここに住まう神の戦士となった僕、シズマ・ライズはコタツに入って神の読み終わった漫画を読んでいた。

「シズマ君、そこ、行ってみたい？」

「ブラフマー様、唐突ですね……悲劇はあつたけど、これは僕が手を出していい問題じゃないんじゃないですか？」

先程まで、はるか遠く（距離の概念なんてないけど）でストラックアウトをしていた僕の仕える主、創造神ブラフマー様（見た目幼女）が僕を楽しそうに見ていた。

その世界、つまり僕のやるべき事は様々な世界に渡り、なすべき事をする事。

つまりは……僕の読んでいる漫画の世界に行く？ と聞いているのだ。

因みに今読んでいる漫画は……「GS美神 極楽大作戦！！」だ。

主人公「横島忠夫」が、様々な成長をしながら最愛の女性の願いの元、その女性の命と引き換えに世界を救う話だ。

まあ、それは兎も角……問題は。

僕に恐怖公、アシユタロスと戦えと言っただろうか？

様々な世界を渡って来たけど、流石に無理がありますよ？

それに今まで僕は、干渉はしても歴史の中までは大きく変えては
いない。

もしやるとしたら、僕は魔族ルシオラの命を救う。

そんな物語の根本を変えかねない大問題を起こすだろう。

それを許容するって事かな？

「その後も彼の苦難は終わらないんだよ。そのヨコシマ君はその後、
反デタント派に襲われて魔族因子が覚醒、最終戦争が起こるよ」

「……なんて夢のない話だ」

恋人を亡くしてまで世界を救ったのに……救われ無すぎる。

「その最終戦争でも一人生き残り……一寸違うね。再生を繰り返し、
神魔の指導者と肩を並べる力を入れる。そして、彼は魔人皇と
呼ばれるようになる。彼の世界に救いを与える為に……行ってみな
い？ シズマ君も行くなら、そうしたいでしょう？」

「珍しいですね。特定の個人に対しての干渉を、ブラフマー様が容
認するなんて」

いつもなら、渡った先で設定されてるマスターや、僕が勝手に認
めた人間の心の願望を叶えるものなのに。

「へへへ……わかる？ そつだよね、私らしくないよねえ」

照れるな。

頬を掻くな。

僕の何十万倍も年上じゃないか。

「そこの二人から打診があつたんだよね」

「二人？ サツちゃんとキーヤんの事ですか？」

ブラフマー様が指差した先には、僕が丁度読んでいたページの、アシユタロスの乱の最後に現れた双界の最高指導者の姿がいた。

「なんて打診だつたんですか？」

「えつとねえ、「わいらは、よこつちに何も出来んかった。せめて、別の世界のよこつちには幸せになつてほしんや」と「私達は彼に不幸しか与える事は出来ませんでした。今ある時間軸に干渉するには、私達だけでは足りません。父なる神の貴女にも、力を貸してもらえないでしょうか？」って言うてたんだよ」

「はあ、やつぱり、ブラフマー様は凄いですね」

事情はわかった。

世界を移り変わつて、強くなるのが僕のやりたい事であり仕事だから、異論はないんだけど……問題が一つだけ。

「それで僕ですか……まあ、構いませんが。でも、僕に神魔族と戦

えるような力はありませんよ」

「大丈夫だよ！ シズマ君は強いし。あの世界は世界間の差が少ないから、メドーサクラスなら赤子の手を捻る位のものだよ」

そんなものなんだ……流石に、明らかに神魔族と戦闘になる世界には行った事ないな。

僕の世界や、Fateの世界の神魔族に類する存在は、未だ逆立ちしても勝てる気がしないし。

「わかりました……僕はどのタイミングに飛ぶんですか？」

「原作一話からだけど、シズマ君も希望がある？」

そうだなあ。

彼にはまず、真つ当な生活をしてほしい。

あの無茶苦茶な食生活を改善させないと……。

と、なると、美神令子をなんとかしないと。

でも、唐巢神父にも出来なかったしね。

美神令子の守銭奴をなんとか……！？

そうか、美神美智恵か！

「過去に、美神母娘がハーピーに襲われた時がいいです」

「へえ、なる程。美神令子の価値観を変えるんだね。でも、その後はどうするの？」

そうなんだよなあ。

僕も年をとらないから、人界にいと困るんだよなあ。

そうか、じゃあ、妙神山にいくのか？

「イベント時期まで、妙神山に行きますよ。そういえば、双界で僕の事を知ってる人、じゃないや、神はいるんでしょうか？」

「多分、サツちゃんとキーちゃんは知ってると思うけど、他はどうかなあ。シズマ君には干渉してこないと思うよ」

邪魔されないならいいか。

要所要所は気合いでなんとかしよう。

「よし、じゃあ、シズマ君の希望に沿って、ハーピーに美神母娘が襲われた所に送るね。」

そうだ、今回は、原作なんて全く気にしないでいいから、ヨコシマ君の為にシズマ君も楽しんで来てね」

楽しんでって……まあ、いつもの事って言えばそうだけど……。

それに、先の予測がたてられないし、そんなにひどく原作ブレイクする訳にはいかないよね。

そして、僕は英雄横島に救いある世界を与える為、彼等の世界に渡った。

僕は投影魔術で、正体がばれないようにピエロの仮面とFateのアーチャーのつけていたマント、赤原外套を投影して身に付ける。ダークも投影すると、僕も後を追った。

「……振り切れないわ。追いつかれるのは時間の問題。なら、せめてこの子だけでも……」

迫るハーピーに対して、逃亡を諦めて美神令子を未来に送ろうと決意する美神美智恵。

今は晴れてるけど……当然、天候も理解してるんだろっな、彼女は。

「追いついたじゃん！ 人間にしては中々すばしっこかったじゃん！ フェザー・ブレット！」

ハーピーの翼から放たれた羽の矢を、神通棍ではじく。

しかし、子供を抱いたままの姿勢ではバランスが取れず、体制を崩す。

続けて放たれるフェザー・ブレット。

回避するしかない美神美智恵は、徐々に追い詰められる。

「後三十分、いえ、十五分あれば……でも令子、貴女だけは死んでも助けてみせる！」

「所詮人間は人間じゃん！ あたいのフェザー・ブレットを弾いたのは大したものだけど、そこまでじゃん。サヨナラじゃん美神美智恵！！ フェザー・ブレット！！！」

放たれたハーピーのフェザー・ブレット。

逃げ場なしと見て、徹底抗戦の構えの美神美智恵。

初めから泣きっぱなしの美神令子（幼児）。

どこまで持つかわからないけど、歴史的に考えると自分でなんとかするんだらうな。

でも、恩を売るにはこのタイミングだな。

僕はハーピーと美神美智恵の間に飛び出す。

そして、フェザー・ブレットをダークで打ち返した。

「おわっ！ 危ないじゃん！ 自分の羽でダメージを負ったら、末代までの笑い物じゃん！」

「……仮面？ 貴方は？」

ちっ、運のいい奴。笑い物になればいいのに。

「つて、何者じゃん、お前は！」

「格好いい……」

「令子、下がってなさい！」

三者三様の反応を返してくれる。

ハーピーは悪役然と、美神令子は戦隊物のヒーローを見たかのよう
うに泣きやみ、美神美智恵は僕も第三の敵対勢力と言う風な感じ。

「魔族ハーピー。今すぐ消えれば、見逃してあげるよ」

「人間如きがあたいのフェザー・ブレードを、偶然弾いた位で何を
調子付いてるじゃん！ まぐれ当たりなら、その美神美智恵もあ
つたじゃん！ 誰だか知らないけど、お前もまとめて消えるじゃん
よ！ フェザー・ブレード！」

まあ、実力を試す意味もあるから、素直に撤退されても困るんだ
けどね。

じゃあ、ハーピーには後悔してもらおうかな？

「きつと、十分後には、死んだ方がよかったと思うくらいに泣する
事になるよ……さて、美神美智恵だね。正直足手まといだから、脇
で震えててくれ」

「…なっ！」

わざと美神美智恵を挑発してから、ハーピーのフェザー・ブレッ
ドを先程と同じように打ち返す。

「危ないじゃん！！ お前、プロの選手かじゃん！ 反射の狙いが

「正確すぎるじゃんよ！」

「……それも悪くないね」

「……令子、良い子だから一寸ここで待っててくれる？」

「うん、わかった。ママは？」

美神令子を下ろすと、神通棍を握り直す美神美智恵。

「あんなわけのわからない格好の変なのに貸しを作ったとあつたら、美神の女が廃るってものよ」

「ママも戦うのね、頑張ってるね」

「ええ、ママ、頑張るわ」

そんな人情ドラマを繰り広げてから、美神美智恵はこちらに向かってくる。

まあ、仮面を付けたちっさいアーチャーな訳だから、変なの扱いもわかるけど……って！

「誰がちっさいのだ！」

「おわっ！ なんじゃん！？ 急に叫びだして……病院行った方がいいじゃん」

「余計なお世話だよ。君に最上の後悔を与える方が先だから」

「ねえ、貴方。あれを引きずり下ろせる？」

美神美智恵が僕の隣に来て、そう聞いてきたのは、馬鹿の一つ覚えのようにフェザー・ブレッドを放ち続けるハーピーに飽きてきた頃だった。

やっと来たか。

僕としては、一寸遅いかなと思った位だった。

美神美智恵が来るまで、僕が何をしていたかと言つと……。

ハーピーがフェザー・ブレッドを撃つ。

僕がフェザー・ブレッドを打ち返す。

ハーピーがそれを回避する。

繰り返されるその一連の動作に、ハーピーの苛つきは最高潮。

ハーピーは黙々とフェザー・ブレッドを放ち続ける機械と化していた。

と、つまりはハーピーで遊んでいた訳だ。

想像より強くないな。

もっとフェザーブレッドは鋭くて、ハーピー自身も素早い動きで攪乱したりするかと思っただけだ。

確かハーピーは特化型の魔族。

その飛行性とフェザーブレッドの威力、射程距離、隠密性から美神美智恵を抹殺する為に人界に来た筈。

やり方が駄目だったのか、美神美智恵が優秀だったのか……まあ、

両方かな？

でも、相対しているって事は、その時点で危険性は半減してると言える。

僕が魔族と戦える証明にはならないな、これは。

「出来るよ……貴女こそ、仕留められるの？ 美神美智恵」

「私を知ってるなら、霊能者としての美神も知ってるでしょう？」

「……いいでしょう。じゃあ、見せてもらおうよ」

二人でハーピーに対する位置取りをして、各々の武器を構える。

「美神美智恵！！ 馬鹿な奴じゃん、こいつに任せて逃げれば、逃げ切れたものを……死ぬじゃん！ フェザー・ブレット！」

放たれるフェザー・ブレット。

二本位まとめて撃てば、まだ戦略の幅が広がるのに……才能の無駄遣いだよな。

「じゃあ、行くよ……」

ダークに魔力を込めて、また打ち返す。

「馬鹿の一つ覚えじゃん！ そんなのに当たる訳……ぎゃん！？」
回避行動後に、悪態をついていたハーピーが悲鳴をあげて落ちてくる！

視線だけで美神美智恵を促すと、準備万端とばかりに、恐らくは

渾身の力を込めた神通棍を叩きつけた。

「ぎゃあああああ!!」

「消えなさい! 魔族ハーピー! 美神美智恵が極楽に行かせてあげるわ!」

力量は充分。

これならハーピーを魔界に戻す事が出来るだろう。

でも、それだけじゃあ面白くない。

「はい、美神美智恵。そこまで」

「きゃっ! あ、貴方、何するの!？」

「ママ、可愛い……」

ハーピーを消される前に、美神美智恵の首筋に手刀を入れて一時的に麻痺させる。

「お前、どういう事じゃん。あたいを助けて何を企んでるじゃん？」

「……わかる？」

「くっ、令子、逃げなさい! このままじゃあ、貴女が……」

「……ママ?」

不思議そうな顔をしたハーピーは、僕の笑顔を見て恐怖に顔をひきつらせながら逃げようとする。

「折角、現界を許したのに、逃がす訳ないでしょ? 発動、フェザード・ブレット」

先程から、僕の撃ち返していた全てのフェザー・ブレードが羽ばたこうとしていたハーピーを取り囲む。

「な、なんなんじゃん!? なんであたいのフェザー・ブレードが!? どうなってるじゃん!？」

「まさか! 撃ち返したハーピーのフェザー・ブレードに靈力を込めて、所有権を奪い取ったと言うの!？」

魔族は威力は高いけど、扱いが雑だから干渉するのは別に難しくないけど。

実際、ハーピーを落としたみたいに、回避直後に軌道を変えて直撃させる事が出来るし。

「さて、ハーピー?」

びくりと震えるハーピー。

「な、なんじゃん? もう魔界に返してほしいじゃん」

「まあまあ、君、僕の召喚獣にならないかい?」

半泣きでへこんでるハーピーよりも、身動きの取れない美神美智恵の方が状況を把握出来るみたいだった。

「魔族を使い魔にしようっていうの!?! 本気なの!?!」

「あたいを好きにしようって言うじゃん!?!」

「選ばせてあげるよ。僕と契約を交わすか、魔界に送還されるか。僕といれば強くなれるよ」

「決まってるじゃん! そんなの魔界に「魔界に送還される場合は、

封印を施した上に自らの羽で串刺しになるけど」……卑怯じゃん！
そんなの、選択の余地がないじゃん！」

まあ、僕が勝者な訳だから当然だよな。

でも、それだけじゃあ可哀想だし、一方的な契約は僕はしない主義だから……。

「僕と来れば、戻れるよ……昔の君に」

「……本当じゃん？ あの姿に戻るんじゃない？」

「僕は絶対に約束を違えない。君を戻すと誓うよ」

じゃないと、妙神山に行けないし。

「……わかつたじゃん。契約するじゃん」

「ん、ハーピー。君の判断は楽しいよ」

僕はハーピーの周囲からフェザー・ブレッドを消す。

出されたスキルを無理矢理取り入れていただけだから、消した時点でフェザー・ブレッドを僕は使えなくなった。

わざわざ言わないけど。

「さて、美神美智恵……」

「貴方、何者なの……魔族の技を奪い、契約を了承させ、墮天したハーピーを戻すと言う……人間じゃないの？」

探るような目で僕を見る美神美智恵。

でも、体はまだ動かないみたいだ。

確かに僕は人間ではないけど。

この世界じゃ、どうなんだろう？

「僕は亡霊の旅人。ゴーストライトラベラー 貴女が真理に辿り着いた時、僕の事がわかるよ」
「無茶苦茶じゃん。こんなのについていっていいのか迷うじゃん」

ハーピーを引き連れて、二人から離れようとしたけど、美神美智恵にちゃんと美神令子を教育するように伝えないと。

何の為に来たのかわからなくなる。

確かこの時期から亡くなった事にして、美神令子の前から消えたんだよね。

そして、寂しさから美神令子は守銭奴に変わってしまった。

「……美神美智恵。貴女がこの後何をしようとするか、僕は知っている。でも、それはおすすめしないよ。美神令子の精神に、多大な影響をもたらすからね」

「貴方、まさか私と同じ……」

一寸違う。僕は先に起こるイベントを知ってるけど、未来人でも時間跳躍者でもないよ。

でも、僕が実は異世界の住民だから……なんて、流石にそこまでは考えつくまい。

特に返答しないまま、ハーピーを引き連れてその場を後にした。

第零章、主人公紹介（前書き）

わかりにくい、技や武具の説明はその時に入れていきます。

第零章、主人公紹介

氏名、 静馬篠宮

真名、 シズマ⇨ライズ

マスター、 創造神ブラフマー

(とある事情により神の戦士となり、人から竜種に転身した)

様々な世界を渡り、経験、スキルを体得している。

所有武器

吉備津天地刀

(タイプ、 剣、 所有者、 桃太郎 / シズマ⇨ライズ)

カリバーン

(タイプ、 剣、 所有者、 アーサー / シズマ⇨ライズ)

ヒヒイロカネ

(タイプ、 手甲、 所有者、 シズマ⇨ライズ)

無駄なしの銃

(フェイルノート)

〔投影魔術〕

(タイプ、 銃、 所有者、 シズマ⇨ライズ)

天術、 早風

(タイプ、剣、所有者、シズマ「ラインズ」)

所持スキル

格闘術

他武器を使った技術

召喚術

投影魔術

固有結界

空想具現化

天術

宝具

打ち砕くもの(ミヨルニル)

天術、柔剛相交

(ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン)

約束された勝利の剣

(吉備津天地刀)

勝利すべき黄金の剣

(カリバーン)

超電磁砲

(レールガン)

真・超電磁砲

(ハイ・レールガン)

固有結界

(――)

他、Fateに関する宝具。

王の財宝

(ゲートオブファンタズム)

〔投影した武器を展開する為〕

天の鎖

(エルキドゥ)

壊れた幻想

(ブロークンファンタズム)

赤原猟犬

(フルンディング)

第二章、山入行じつよ(そのいち) (前書き)

話は全く進みません。

第二章、山へ行こうよ(そのいち)

「 告げる、

汝の身は我の下に、

我が命運は汝の剣に！

聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら

」

契約の文言。

元はF a t eのサーヴァントの文言だけどね。

僕力ある言葉は、対象である魔族ハーピーに働きかける。

「 我に従え！ ならばこの命運、汝が剣に預けよう………！」

「 わかったじゃん、魔族ハーピー、その名に懸け誓いを受けるじゃん！

貴方を我が主として認めるじゃんよ、シズマ＝ラインズ」

誓いは交わされた。が、ハーピーの姿は変わらない。

「 シズマ！ 話が違うじゃんよ！ 召喚獣になれば、あたいはハルピュイアに戻るって言ってたじゃんよ！」

「 ちゃんと話を思い出して。そんな言い方は全くしてないから。僕は召喚獣になれば戻してあげるよって言ったんだよ」

期待し過ぎたせいか、どうも召喚獣になった時点で風の精霊ハルピュイアに戻れると思っていたみたいだ。

怒るハーピーを適当にあしらいながら、僕等は神族の人界での中

継地点である妙神山に向かっていた。

「ずるいじゃん……あたいの純情な心をシズマは傷つけたじゃん……ずるいじゃん……あたいの純情な……」

急ぐ旅でもないので、人型を取らせて徒歩でゆっくりと妙神山に向かうが、繰り返し独り言のように僕への不平を洩らす。

流石に期待に出来ない可哀想かなあ。

まあ出来なくは無いんだけど、場所が悪いんだよね。

人界は基本的に、双界に監視されている。

そんな場で軽々しく力を使う訳にはいかない。

世界から僕は注視されていないなら、尚の事目立つ訳にはいかないから。

最も、このハーピーも面白いから敢えて説明はしないけど。

「召喚士とはそう言うものだよ。もうハーピー、君は僕には逆らえないんだからね」

「ウキー！ なし！ なしじゃん！ あたいはもう魔界に帰るじゃん！！」

「そんな大声でしたらGSに退治されるよ、虚弱体質のハーピーちゃん？」

「ムキー！ 仮面取ってもサディスト振りは変わってないじゃんよ

おおおおお

僕はどこ吹く風で、ハーピーの叫びだけが辺りにこだました。

そして僕等は、とある結界で覆われた森の奥深くに来ていた。

そう、人狼達の隠れ里だ。

道のり的には妙神山の途中みたいなものだし。

「ここ、何があるじゃん？ あたいは妙神山には入れないけど、はつ、ここに捨てて行ってくれませんか？ 魔界に帰れるじゃん？」
「希望的観測おつ。そんな訳無いでしょ。全く……君の為に来たのに、妙神山に直行するよ？マジで」

訳がわからないだろうな。

僕が知ってる中で、神魔族に組みしていない勢力の中で最も強固な結界を築いているのは、この人狼族だ。

だから、ハーピーを元に戻すのに最も場所的に優れている。

問題があるとしたら、今ここにいるのが明らかに姿を隠した魔族と、それを率いている人外存在と言う事なただけ……。

山に入る時点で気配を絶っておけば良かったな。

まあ、一応呼び掛けてみるか。

「ハーピー、魔気を抑える。ここは人狼の隠れ里だよ。あまり、刺激しないように。誇り高き人狼よ、僕は召喚士、シズマ＝ラインズ。貴方方の助力を得たい。対話の場を設けてはくれないだろうか？」

語りかけている間に、ハーピーを促して買ってきたドッグフードの封を開けさせて、中まで匂いが届くようにする。

原作ではこれで、道は開けたけど状況が違うからな。

しかも、僕が一方的にお願いをするんだから無理矢理なんて出来ないしな。

「それにしてもシズマ。一体何をするつもりなんじゃん？」

「……時間かかりそうだな。ハーピー、君をハルピユイアに戻すのさ、この中で」

長期戦になりそうだと判断して、ビバークの準備をしながらハーピーに僕の考えを説明する。

「ちゃんとあたいの事考えてくれてたじゃんね……感激じゃん。シズマ、良い人間だったじゃんね」

大袈裟だな。一寸いじめすぎたか？

なんか調教されたみたいになってるし。

それにしても、魔族のハーピーの鼻を持ってしても、僕が竜人だという事はわからないか。

ハーピー。契約して、魔力や情報が流れ込んでるんだから、そこ

に魔力と神通力、神力がある事に気付こうよ……ある程度の記憶だつて共有出来るんだから。

「冗談はともかく、ハーピー、君も僕の仲間だからね。当然、君が充実する為に尽力するさ」

「……惚れそうじゃん……ん？ でも、シズマはあたい等魔族も神族にも、見つからないようにしないとイケないのかじゃん？ じゃあ、なんで妙神山に？」

おつ、生徒のハーピー君が鋭い所を突いたよ。

頭を撫でてあげよう。

「僕は普通の人間じゃないからね。注目される訳にはいかないのさ」
「訳ありマスターじゃんね。人間界も中々楽しい事になりそうじゃんね」

いやいや、僕は、極一部の例外だからね。

「開かないな」

「……じゃん」

村の結界の入口でビバークしているが、依然結界は解かれない。

時間はまだまだ余裕だけど、このままじゃつまらないな。

何か手早く、北風と太陽的な解決策はないかなあ。

「どう思う、ハーピー？」

「あたいは馬鹿だからわからないじゃん。誰かに説得してもらえば

いいんじゃない？」

説得ねえ……僕にはそんな友好的な知り合いいないしなあ。

よしんばそれだけの力を持つ誰かに頼めても、世界を飛んだばかりの僕を信用してくれないしなあ。

何処かにいないかなあ、そんな、漫画みたいな、川沿いの土手で殴り合った後、親友になるような存在……。

「……!? それだ!」

「おわあ! ビックリしたじゃん! やっぱりシズマは病院に行っただ方が……」

「いる! いるよ、そんな存在!」

一人だけ思い浮かんだ。

頼るならあの人しかない!

ナイスアイデアを出したハーピーを褒め称えながら、僕等は足早にその彼の所へ行く事にした。

第二章、山へ行こうよ（その二）

「一体なんなんじゃん……」

「なる程……こういう風に、世界は収束するのか」

今、僕の目の前ではまさに死闘が繰り広げられていた。

相手は妖怪の医者と言われていた天狗と、主要人物の一人である犬塚シロの父親。

ならば今は、シロの発熱での膏薬を取りに来た所か。

でも、どうしようかな？

この結果、彼は片目の視力を失う。

それがなければ、犬飼ポチの妖刀八房の持ち出しも防げるかもしれないし、その命も救えるかもしれない。

でもなあ、そうするとシロが街に出る事がなくなる。

つまり、横島がシロと会う事がなくなる。

「まあ、彼ならそっちの方を望むだろう」

「何を独り言を言ってるじゃん？ やっぱり病院じゃんじゃん？」

毎回毎回失礼な奴だな。

ほっぺたつねってやれ。

「ひ、ひたひ、ひたひじゃんほお」

「口は災いの元だよ」

犬塚はやはり強いな、でも、天狗には及ばないみたいだな。

あ、刀が弾かれた。

これは決まったな。

シロが治ってるのを見ると、ただでは負けない筈……つまり、目をやられるのは、ここか！

「発動、ハーピー、フェザー・ブレード！」

「ん？ わかったじゃん」

放たれるフェザー・ブレード、その羽は僕の狙い通りに天狗の拳を制止した。

「いるのはわかっていたが……無粋な」

「……何者！」

「すまないけど、勝敗は決していた。ならば、無駄に負傷するいわれはないよ」

「私は、娘の為に、どうしても天狗殿の軟膏を手に入れねばならない！」

勿論、シロには治癒してもらわなければ困る。

だから、代替案として……。

「代わりに僕が貴方と戦います、天狗殿。勝った暁には、人狼の彼に、彼の望む薬を差し上げてくれないか？」

「……魔族を連れた人間よ。お前も私に望みがあつたのではないのか？」

天狗にも僕が人間にしか見えないか。

いい感じだね。

でも、それに関しては犬塚がここにいた時点で、半分叶っているようなものだし。

「……しかし、何故貴方が私の為に」

「別に貴方じゃなければ駄目って事はないよね？　これが出来たら人狼の貴方に手を貸してほしい事があるんだ」

ハーピーは意味がわからない。と言った顔。

ハーピー一寸馬鹿すぎないか？

脊髄反射で反応のするの止めようよ。

天狗は別に誰が相手でもいいという感じ。

犬塚は正直立ってるのも辛かったみたいで、座り込んでしまう。

「人狼殿、天狗殿、それで構いませんか？」

「私に出来る事なら、なんでも……宜しく願います」

「魔族を手駒にする人間を信用しろと？」

犬塚は娘の為に盲目的になつてみたいけど、天狗はそうでもないみたいだな。

「そんなものは拳を交わしてみればわかるだろう？」

「……それもそうだな」

ハーピーには手出し無用と伝え、犬塚をヒーリングするように指示を出す。

「なんであたいが、人狼のヒーリングなんて……」

「なんか言つたかい？ 僕の召喚獣の魔族ハーピーちゃん？」

「なんでもないじゃん！ ヒーリングなんてあたいは得意じゃないのに……そら、人狼、傷口を出すじゃん！」

「あ、ああ……済みません……」

「本当に使役しているのだな、人間が魔族を……」

「意外だった？ 魔族（彼等）の方が力には従順だからね……」

言外に魔族よりも強い力を持っている事を伝える。

「いや、面白い。私の所に来て、先客の願いを叶える為に戦うなどと言う存在。しかも魔族を使役して、その魔族よりも強いと言う。楽しみだよ」

「それはどうも、じゃあ、始めようか？」

そこからは言葉はいらなかった。

さて、僕の戦術としては霊力の有無はわからないから使えない。

魔力に関しても、この世界に魔術という存在がないみたいだから無闇に使う事が出来ない。

僕の戦術は殆どが魔力を使うんだけどなあ。

1対1を渴望する天狗に対して、僕の十八番の召喚術を使う訳にもいかない。

つまりは……本当に拳でのぶつかり合いしかないって事だ。

こういった試合形式のぶつかり合いに対して、天狗は超一流だ。

全く……心躍るとはこの事だね。

先制は天狗だった。

素早い移動からの突き出しや、縦横無尽に動き回り攪乱してくる。

僕も、受け流しを主体とした構えで一つ一つ確実に流して隙を窺う。

「動きに隙がない。彼は本当に人間かい？」

「あたいのマスターだからね。この位当然さね」

無闇に威張るなハーピー。

確かに天狗の攻撃は、フェザー・ブレードより早くはないけど。

「避けるだけか？ お前もやはり口だけの人間か？」

僕の間を狙っているみたいだが、そんな隙は見せない。

軽いジャブ程度の攻撃を繰り返しながらも、精神的な疲労から肩で息をしながらで僕を挑発してくる天狗。

「呼吸が乱れすぎだよ。そんな挑発ないでしょ？」

「……まだだ、まだ負けと決まっではない！ 秘術、影分身の術！」

まだ一撃もくらう前から追いつめられた天狗は、早速秘術を使う。

影分身か……便利だな。

その姿を二体とした天狗が、揃って襲いかかる。

左右からのラッシュを腕一本ずつで防ぐ。

ドラゴンボールの世界か！

「ーもらったぞ！」

背後から、第三の天狗が飛び込んでくる。

いやいや、わかってたから……。

「考えが甘いよ、天狗殿……」

左の天狗にはラッシュ時のラグをついて、拳を叩きつける。

分身だったみたいで、煙を上げて姿を消す。

右の天狗はそれを見て一瞬姿動揺する。

その間に、服を掴んで背後の天狗に投げつける。

「んな!？」

「天狗殿、敗因は、僕を人間風情と侮った事だよ」

空中で正面衝突した天狗二体に、必殺の一撃を叩き込む。

「必殺! ライダーアアアアアアアアキツイイイイイク」

格好つけた、ただの跳び蹴りが直撃した天狗は、木々を薙ぎ倒しながら地面に叩きつけられた。

「ー成敗! ハーピー、ヒーリングだ」

「っ、強い……」

「なんで、こんな事ばかり……」

勝負はついた。

早速ハーピーにヒーリングさせる。

やりすぎたかな？

見ると、天狗は全くの意識不明状態で頭をお星様が飛んでいた。

「まさか私が人間に完膚無きまでにやられるとは……」

「油断するからだよ」

「そんなレベルのものではなかるつよ、全く……ほら、人狼よ、約束の軟膏だ」

投げ渡された薬を犬塚は大切に受け取る。

「よいのですか？」

「構わぬ、それがこの人間との約束だからな。強き人間よ、お前の名を覚えてくれ」

「シズマ……静馬篠宮。召喚士だよ」

どうやら天狗に惚れられたか？

誇り高き妖怪が名を覚えると言う事は、それだけで意味がある。

「私も自らの未熟を痛感させられる、楽しい時間であった。何時でも来るといい。私はここにいる、歓迎しよう」

認められる、仲間として扱われると言う事は、家族として扱われるという事だから……。

「天狗殿、では、私は……」

「早く娘の所へ行つてやれ」

一刻も早くシロの所へ戻りたい犬塚は、そわそわととんでもなく落ち着きがない。

僕等との約束については、移動しながらと話している為、僕等も準備をする。

「あたい達も行くじゃんよ」

「そうだね。天狗殿、やっぱり一つお願いが……」

「なんだ？ やはり、私に願いが……」

「いや、違う。さっき見せてもらった影分身の術、使わせてもらってもいい？」

天狗は目を見開くと、これは愉快とばかりに笑い出した。

「我が秘術を、一度見ただけで我が物としたか。ほんに規格外よな好きにするといい」

許可も得たし、色々な使い方も考えてみよう。

例えば、あれで武器でも増やして見たら面白そうだな。

僕等は呆気にとられたハーピーと犬塚と一緒に、人狼の里に歩を進めた。

第二章、山入行こうよ(そのさん)(前書き)

プライベートで余暇がとれない状況にあり、暫くアクセス出来ないと
思います。

なので、書きためていた分を全て投稿させてもらいます。

楽しんでくれていた方には、本当にごめんなさいです。

今後は期間未定でいつか更新になると思います。

第二章、山へ行こうよ（そのさん）

「なんで、私と同じ速さで走れるんですか!? 人間でしょう!？」
「あたいのマスターだからじゃん!」
「威張るな、虚弱体質……端から見ると、魔族に人狼が襲われているようにしか見えないだろうな」

我先にと急ぐ犬塚と、空を飛んでついて行くハーピーと、併走する僕。

驚くのも無理ないだろうけどさ。

「早駆」と言う、僕のスキルの一つ。

もっと高レベルで使えば、超加速も可能である。

因みに犬塚には、僕等の願いは既に伝えてある。

村に入る為の口添えをしてもらおうと、天狗の所に行った事も。

神族への転化に土地を使いたい。と言うだけならば、多分大丈夫だろう、との事。

神族が生まれると言う事は、その土地が神聖な力で包まれると言う事。

むこう何十年の豊作や微弱ではあるが、村の守護する力もあるのだから。

「では、行ってきます。まずは娘のもとへ行かせてもらうので、少し待っていてください」

「うん、わかってる。物事の優先順位はわかってるよ」

「ああ……楽しみじゃん、これであたいもハルピユアに戻って、姉様達に会えるじゃんよお」

村に入っていった犬塚。

夢想するハーピー。

長年の夢が叶うんだ。そりゃあ、うっとりもするよなあ。

ハーピー短いつき合いだったけど、君との契約は楽しかったよ。

さて、まあそれはともかく……待ってる間暇なので、ハーピーを強化してみる事にした。

一日目

「意識が行き渡らないから、羽の同時操作が出来ないんだよ」

「む、難しいじゃんよ」

二日目

「フェザー・ブレットを撃ち出して終わっちゃ駄目だよ。その後も操作を継続して、複数回対象を狙うようにしないと」

「あ、頭が痛いじゃん……」

三日目

「込める魔力が足りないよ。この位の威力じゃ、一撃必殺の道具にはなりえないよ。もっと唯一の羽には魔力を込めないと」

「あたいにそんな魔力ないじゃんよ……」

四日目

グロッキーになったハーピーを、初日に作ったハンモックに寝せてのんびりしていた。

「そろそろかな？」

「うう……嫌じゃん。あたいの羽にやられるのは、羽、羽は嫌……」

やりすぎたかな？

僕やハーピーは睡眠が必要ないから、72時間ぶっ通しで鍛錬したのが、随分堪えてるみたいだ。

「静馬殿、お待たせしました……って、これは!？」

ん？ なんか変かな？

見回してみても、犬塚が驚いている理由がわかった。

えぐれた地面、なぎ倒された木々。

そう言えば、隠れ里なのを忘れてたよ。

一寸暴れすぎたな。

「ああ、ゴメンね、ハーピーの鍛錬をしてただけで、やりすぎちゃった」

「は、はあ、そうですか。あの、長老が静馬殿をお待ちです」

やっと会えるか。

グロツキーのままのハーピーを引きずって、僕等は人狼の里に足を踏み入れた。

「契約獣、ハーピー、古の盟約に従い、その姿を己の望むものへと転化せよ」

「ま、魔力が溢れて……ち、力、あたいは、あたいはー」

光に包まれたハーピーが次に姿を表した時、その姿は威厳ある風の精霊、ハルピュイアであった。

「わ、私、戻れたんですね……」

涙を流してその場に座り込むハルピュイア。

見ると観客に来ていた人狼達も、貰い泣きしていた。

散々ハルピュイアが墮天した理由を話したからな。

「ハーピー、いや、ハルピュイア。君は神族に戻る事が出来た。この後、どうする？ 君が望むなら、神界への道を開こう……いや、妖精郷か？」

ハルピュイアも元に戻ったし、もう必要もなくなった為、契約を解除しようとする。

「お待ち下さい、マスター」

「どうしたの？ 君を戻す為に契約しただけだから、もう契約なんて気にしないでいいよ？」

「こんな大恩を受けて、何も返さずのうのと天界に帰る事等出来ません」

義理堅いなあ、原作のハーピーとはえらい違いだ。

いや、まあ僕と共にいたハーピーならもしかしたらとは思ってたけどさ。

「そんな事は気にしないでいいさ。僕は僕の目的の為に君を捕らえたんだから」

「……魔人皇の事ですか？」

何故それを！？

いや、彼女はまだ僕の召喚獣。

僕の記憶を読んだか？

しかし、ハーピーは……。

「ハルピユイア、君はどこまで知った？」

「流石マスターです。すぐに気付かれましたか……小さな主の事位です」

……最悪だ。

殆ど全てじゃないか。

「これじゃあ、ただ解放する訳にはいかなかったな。」

「契約の持つ重みは理解しているつもりです」

つまり、今の自分は、僕の持つ記憶をほぼ全て有していると考え
るべきだな。

周りの見物客（人狼）達は、流れについていけずポカーンとして
る。

……まだ泣いてるやつもいるな。

全く……空気嫁。

「じゃあ悪いが、ならば契約を破棄する時に、記憶を消させてもら
う」

「マスター、まだわかりませんか。鈍感や察しが悪いとか言われま
せんか？」

……あるな。

何故それを知っている？

「私は、マスターについて行く、と言っているんです」

「しかし……それでは、君が望んでいた虹の女神との再開も……」

僕の召喚獣になると言う事は、世界を捨てると言う事。

つまり、仲間との永遠の別離だ。

ハーピーみたいに、種族が変わったから会えない、みたいなレベルのものじゃない。

待人がいるならば、尚更そんな事するべきじゃない。

「恩だけではなく、貴方という人に触れて、私が決めた事です。どうかマスター、私に貴方の使い魔となる許可を……」

そこまでしてなんで、僕を気にしてくれているのかわからないけど……まだ選択の機会はある。

長い目で見て判断してもらおうか。

「……わかった。この物語の終着点までは、まだかなりある。ならば、その最後の時に、改めて君の答えを聞かせてくれ。それが僕の最上級の譲歩だ」

「頭の固い……わかりました。ではマスター、私は旋風の精霊ハルピュリア、改めて今後ともよろしくお願い致します」

仕方がないだろう。

僕の為に、全てを捨てるなんて言えないし、なんなら最後の時に無理矢理契約解除するって手もある。

今、僕に在る契約獣はカラスのクロウだけなんだから……言葉を話せる召喚獣には、かなりそそられるさ。

意識を戻すと、周囲から聞こえてくる溢れんばかりの拍手。

それは人狼達のものだった。

「おめでとう、精霊様」

「幸せにな」

「今の時代は女性上位だ」

口々に今の契約について言ってる筈だけど……何かちがくない？

「有難う御座います。私、幸せになります」

なんか、こつ、もっと、チャペル的なあれを思い浮かぶんだけど

……。

「いやあ、ワシも随分長く生きてが、人と精霊様の婚姻等初めてじやわい」

「私もです。シロにも見せてやりたかった」

いや、違うよ、あなた方、間違ってるからね。

「おい、里の牧師様を呼んでこようぜ」

「そりゃあ、いい。誰か、赤飯を準備しろ」

「あらあら、皆様、有難う御座います」

僕は必死に誤解を解いていこうとするが、まるで聞き耳を持たない。

長老に会うや否や、二つ返事で転身の許可を出した時から疑問に思っべきだった。

人狼達は……お馬鹿さんだ！

「投影………開始」
トレースオン

誰も僕の言葉に耳を傾けないのをいい事に、僕は投影魔術を使って、刃を潰したダークを二本投影する。

「マ、マスター。お祝いして下さってるのですから、落ち着いてください……」

「うるさい……もういやだ。強引で、話を聞かない人外はもう沢山だあ！」

筆頭として主の幼女が浮かんだが、その全てを怒りに変えて、僕は暴れ出した。

村の男達を全員叩きのめした事をここに述べておく。

「長老、今回は僕等に村の貴重な場所を使わせてもらい、有難う御座いました」

「いやいや、ワシ等にとってもよい話じゃったからの……それに、いいものもみれたし」

人狼を叩き伏せてから、すぐに村をでようとしたが、長老や犬塚に止められ一泊する事になった。

夕食は大広間で、熱が下がったばかりというシロと、父親の犬塚だけが不参加で、他の全ての人狼が参加するというお祭り具合だった。

人狼は祭り好きか。

超回復すごいな。

二三日は動けないつもりで、はたいたのに。

なんか、里に入る前は不審者だったのに、帰る時は家族みただった。

天狗もだけど、妖怪はやはり情に厚い。

今の僕には眩しすぎるな。

「静馬殿、本当に有難う御座いました。シロが助かったのは、貴方のお陰です。精霊様がいなければ、シロを嫁にでも、と思ったのですが……」

「あら、有難う御座います」

まだ言うか。

僅かに目を細めると、それだけで伝わったのか、長老にぶん殴られる犬塚。

すぐに起き上がって、信じられない位に手を振る犬塚。

全くもう……。

「静馬殿、貴方も、精霊様も、ワシ等にとっては最早家族同然。いつでも訪ねていらしてください。歓迎します」

「有難う御座います。嬉しいです。では、これで失礼します」

シロの顔を見れなかったのは残念だけど、家族が出来たのは嬉しかった。

隣に歩くハルピユイアを見ながら、次の行き先、妙神山に向かって歩を進ませた。

第二章、山へ行こうよ(そのよん)

崖を越え、谷を越え、僕等の山にやって来た。

はい、こんにちわ。世界を渡る旅人、シズマⅡライセンスです。
今は世界観に合わせて、静馬篠宮と名乗っています。

ここは妙神山にある神界と人界の中継点、妙神山修行場です。

「この門をくぐる者、汝一切の望みを捨てよ……ですか」
「やる気のない人は帰れ、って事か……ここまで来てそんな人いるのかね？」

門に張り付いたオブジェに見える鬼門の顔。
左右に控えるその胴体。

(何も言わなければ、鬼門は話さないつもりなのかな?)
(いえ、一寸だけ、ふるふるしています。話しかけるタイミングを
みているのではないのでしょうか?)

人見知りか……!

「入る手段がないねえ」

「そうですね、門を叩けばいいのでしょうか？」

「汝等……」

「ハルピユイア、フェザー・ブレットって、まだ使えるの？」

「はい、勿論です。マスターの鍛錬で行った事は問題なく行えます」

「一寸……」

「それは凄いなあ、ハルピユイア、苦勞してたんだね」

ハルピユイアの手には、光り輝く羽が。

ハーピーの頃とは、込められたエネルギーは比べ物にならない。

それだけ、墮天によって弱体化してたつて事だろうな。

「じゃあ、ノックのかわりに一撃当ててみようか？ 門が開くかもしれない」

「わかりました。では……」

「「待て……！」」

鬼門の胴体が、門と自分の顔を守るように立ちふさがる。

「「お主等はこの妙神山修行場に来た修行者だろう！ 問答無用で攻撃するやつがあるか！」」

「やっとな動いたか、空気読めない鬼だ事」

「テンプレ的ですね」

やっぱり顔が門にくっついてるから、フェザー・ブレットは怖いよね。

「「我らはこの門を守る鬼、許可なき者、我らをくぐることをまかりならん！ この右の鬼門！ そしてこの左の鬼門あるかぎり、お主等のような非常識な者には決してこの門開きはせん」」

「ハルピユイア、ゴー！」

「はい、フェザー・ブレット！」

「「グオアアアア」」

「やっぱり、門毎吹き飛んだねえ」

「一寸強すぎたでしょうか？」

それでも、ハルピユイア的には大分加減したんだろう。

鬼門にも大きなダメージはないみたいだし。

「く、貴様等……がくっ！」

「右の！ しっかりしろ！ 右の……！」

なんか、向こうではドラマが繰り広げられてるなあ。

「じゃあ、入ろうか？」

「よいのでしょうか？」

いいさ、鬼門の試しは終わったし。

「お前達、一体何を……二人共、これは一体何事です！？」

建物から出て来たのは、竜神族の証拠である角をはやした一昔前の服装をしている管理人、小竜姫だ。

修行場に足を踏み入れた僕等は見えてないみたいで、神剣を手にして鬼門達に事情を確認している。

「あの者達が急に……」

「いきなり我ら鬼門を破壊しようと……」

鬼門、へりくだり過ぎじゃない？

(この世界、鬼と竜にそんな位の違いがあるの?)

(そうですね、見たままだと思ってもらえれば……)

鬼も苦勞してるんだなあ。

「貴方方、この妙神山修行場には、修行でいらっしやっただんですか？」

「はい、鬼門の試しと言うものがあると聞いたので……門を壊してしまっただのは申し訳なく思っています」

「まあ、彼等にも非はあった訳ですし、今回は多めに見ましよう。でも、使役する神族を使うのはギリギリですね」

やっぱり駄目か……。

(まあ、そうでしょうね。私はマスターの召喚獣ですが、マスターの自力ではありませんからね)

(はあ、ま、見逃してくれたからいいんじゃない?)

とりあえずという事で、やっと修行場に入る事が出来た。

さあ、これからどうなるかな？

「申し遅れました。私はこの妙神山修行場の管理人をしています、小竜姫と申します」

「これはご丁寧に、私は召喚術士静馬篠宮。彼女は僕の契約召喚獣の……」

「旋風の精霊、ハルピユイアと申します。以後、お見知りおきを」

やはり知っていたのか、小竜姫の驚きは大きい。

「ハルピユイアって……魔族ハーピーですか！？ 何故、いつ彼女が神族に転化したのですか！？」

「またもや神剣を取り出してハルピユイアに向けようとする。」

浅慮が過ぎるだろう、小竜姫。

全く……。

「転化していたとしても、今は神族ですよ。自らの同士とも言つ存在に手をあげるのですか？」

「……うっ！」

僕の言葉を受けて、自ら手を止める小竜姫。

「それとも、一度でも墮天した存在は既に仲間ではないと？」

「いえ、そんな事は……」

「真つ直ぐ過ぎる気質の小竜姫は、僕の言葉に少しでも思い当たる部分がある為、かなり歯切れの悪い返答を返す。」

「彼女は僕の召喚獣です。侮辱するというならば、僕にも考えがあります」

「マスター、何をするつもりですか？」

「うーん、そうだな……上司に言いつけようか？」

「申し訳ありませんでした！ 妙神山修行場を預かる立場なのに、軽はずみな行動をとってしまいました！ ハルピユイアさん。すみませんでした！ どうか、平に平にご容赦を！」

「いやいや、ゲーム猿を恐れすぎだろうよ。」

「どうせ、このやり取りも見てるんだらうから無駄なのに……そう言えば、この娘も結構ドジっ娘だしね。」

「なんか、ここに留まる為の話や修行はもう一寸後になりそうだった。」

「すみません、取り乱してしまっ……」

「お気になさらず。マスター、話を進めますよ」

「ん？ ふあああ。わかったよ、すぐ行く……」

余りに長い間、ハルピユイアへの謝罪が続く為、横長の椅子に寝ていたのだ。

「……私のせいなんでしょうが、よく人間が、神族の管理する土地で寝てられますね」

「気にしない、気にしない。そんな些細な事で悩むと……はげるよ」

「はげません！ 全く……それで、貴方はどんな修行をお望みですか？」

ふむ、なんて言ったものか……とりあえず目的は達したし、10

年間は暇なんだよね。

でも外界にいと、10年間年若い人間なんて奇異の目で見られる。

だから、修行はついででいいからここに置いて欲しい。

そんなの、どう伝えようか？

(いずれ、ある程度は話すのです。多少は、マスターの情報を開示する必要があると思います)

(やっぱりそれしかないか……彼女は真っ直ぐ過ぎるから、気をつけないとな)

とりあえず、10年もいれば一回位はゲーム猿と会う機会はあるだろうし……普通の修行者を装いましょうかね。

神族の鍛錬にも興味あるし。

「自身の限界まで強くなりたいのです」

「何故そんなに力を求めるのです？ 過ぎた力は己を滅ぼしますよ」

ハルピユイアは、僕と小竜姫のやりとりを黙って見ている。

きっと、僕の目標もわかっているだろうな。

「絶対に救わなくてはならない相手がいるのです。この存在を賭けても。これは僕にしか出来ないんです」

「……そうですか。わかりました。人界も色々あるみたいですね。

本来ならば、紹介状を持っていない方の修行はご遠慮頂くのです

が今回だけ特別ですよ」

紹介状か……忘れてたな。

(今から唐巢神父の名前とか出してみる?)

(いえ、それでは逆に怪しまれます。むしろ彼女の好意に甘える方がよいでしょう)

「それで、篠宮さん。貴方はここでどのような修行を望みますか？」

それだ！ その質問を待っていた！

今だ、トラップカード発動！

「とにかくきついやつを。判断は小竜姫様にお任せします。期間は大体10年以内でお願いします」

「私も転化して時間が経っていない為、出来るだけ長い時間あった方がマスターの助けになれる為、助かります」

「また、難しい事を言われますね。それでは修行者と言うより、私の弟子ではないですか」

なるほど、それも悪くないな。

魔人皇となつた横島に最後まで助力した神族は、彼女と天龍を中心とした竜神族だったしね。

今の内に引き入れておくか。

「神剣の使い手と音に聞こえた、小竜姫様の弟子ですか。素晴らしいですね。宜しければ僕を小竜姫様の弟子にしてはもらえませんか

「？」

「えっ？ 私、私に弟子ですか……愛弟子、可愛い、やりがいのある……でも、私は妙神山修行場の管理人と言う立場が……」

迷ってるな。

確か彼女に直の弟子はいない筈。

修行者は妙神山に来たのであって、今まで小竜姫に修行を請いに来た人間はいない筈。

「……と思って言っただけだよ」

「はあ、私も多少は効果があるかと思って話に乗っけてみたのですが……」

まさか、ねえ……。

「「ごうもトリップ」(される)するとは……」

結果としては、彼女の弟子になる事は出来た。

しかし、それは今、この時間から実に一時間以上も小竜姫が妄想に耽った後の話であった。

第二章、山へ行こうよ(その1)

「じゃあ、まずはこの服に着替えてくださいね」

日本の銭湯みたいな作りの建物に入る際に渡された服に着替え、僕はその先の異空間の広がる土地に出る。

因みに着替えはハルピユイアは別である。

僕は別に構わなかったが、ハルピユイアと小竜姫様が反対したのだ。

なんか、二人に言われると肯定した僕が、飛んだ変態野郎みたいで嫌だな。

一応弟子入りしたので、様付けで呼ぶ事にした。

小竜姫様は、普通に名字呼びである。ぶっちゃけた所、偽名なので名字読みの方が違和感があるけど。

(マスター、この空間……)

(うん、一寸失敗したかもね)

目の前には、天下一武闘会よろしく、戦闘場と人一人入れる程度の魔法陣が設置されている。

(やっぱりこれって……あれだよなあ)

美神令子が受けたデットオアアライブの修行だよな。

(ですね。しかも、マスターのシャドウは恐らく……)

(……確実にドラゴンだよなあ)

一応、今までの異世界の旅で竜種に転化してるからなあ。

(今バレるのは不味いよね?)

(それはもう……マスターは既にこの世界の竜神、小竜姫さんに弟子入りしていますから。最悪、行かず後家と言われる竜神に拘束され、この場でゲーム猿の名の下に祝言があげられ、幸せな、しかし確実に何かを失ってしまう選択肢と共に、人界に帰れなくなる羽目に陥るでしょう)

なんか、随分具体的だな。

(ハルピユイアってさ……小竜姫様の事、嫌い?)

(いえ、そんな事ないですよ。良くも悪くも神族ですしね)

ううむ? ハルピユイアは神族じゃないのかな?

(私をその括りから解き放ったのは、どなたですか?)

(……すみません、僕です)

じゃあ、仕方ない。適当に誤魔化すか。

「じゃあ、篠宮さん。この方……」「一寸待つてもらえますか?」「……どうされました?」

不思議そうに首を傾げる小竜姫様。人を疑う事のない無邪気な表情だね。

「何をするかはわかりませんが、長期間の修行の予定です。よけれ

ば、まずは僕の力を知ってもらいたいのですが?」「それも一理ありますね。いいでしょう。じゃあ、特別に私が相手をします」

腰の神剣に手をかける小竜姫様。

(ちゃんと加減してくれるよね? 彼女?)

(……余裕もって回れば、多分)

(それは無理って事?)

(マスターが加減はしないって事でしよう?)

(魔術、召喚術、天術、超能力全て使わないんだよ。技術位は真剣にやるぞ)

やはり、スラリと神剣を抜き放つ小竜姫様。

「篠宮さんは獲物は何にしますか? 特別にそちらにある物は、何を使用されても構いませんよ」

見ると、そこには様々な武器防具が出現していた。

(中々の物ですねえ)

(うん、結構ランクの高い武器ばかりだ)

(流石愛弟子ですね)

そう言われるのも、なんか罪悪感が……。

いつか真実を話します。

そう心の中で謝罪して、とりあえずその中であつた真鍮の手甲と苦無を手にする。

「では、これ等をお借りします」

「……わかりました。いつでも構いませんよ。かかってきなさい」

さて、ブラフマー様の言葉が真実なら、この状態でも良い勝負が出来る筈。

ぶっちゃけ、これで勝ってしまったらもう仕方ない。

そう言う運命だったんだろう。

じゃあ、始めようか。

幾つかの苦無を忍ばせ、手甲を装着して小竜姫様と相対した。

さて、お兄さんは瀕死です。

小竜姫様との手合わせ、初めは順調だった。

太刀筋の分かり易い小竜姫様の剣は、確かに速さはあるけど対処出来ない程じゃない。

回避、受け流しをしながらカウンターを狙う僕の戦術は効果的だった。

まあ、近接戦闘のスペシャリストじゃない美神令子が凌げた位だ。

僕に出来ない筈がない。

問題はその後だった。

どうも劣勢を悟った小竜姫様が、即座に使ってきたのだ。

超加速を。

「……ぐはっ！」

「どうしました？ まだ、私に致命打は与えられてませんよ？」

背部に走る衝撃に耐えながら、体を起こす。

「一寸反則じゃないかな、これは？」

（やはり、こうなりましたね。マスター、如何なさいますか？）

姿を消すと同時に、襲う攻撃を直感のみで防御しながら攻撃の隙を探す。

（やられっぱなしもしゃくだね。せめて一矢報いたいけど……）

（マスターは一応召喚士なんですよ……と、もう聞いてませんね……）

韋駄天じゃない小竜姫様は、長時間の超加速は使えない筈。

その動きは無限じゃないし、必ず何処かで止まる。

そこを突くしかないな。

でも、そんな事は本人も理解してるだろうから……手は……。

「人間としては大したものですが、私の弟子になるにはまだまだこれから修行が必要ですね。じゃあ、今日はこれでお終いです!」
入った!

「発動、苦無、影分身の術!」

僕は苦無を空に放ると、その数を増加させる。

僕の体を包める位の数を。

「なっ!?! これは!?!」

「そこですね!! 拳技、短勁!」

僅かな抵抗と共に消えていく苦無。

それにぶつかり鋭さの鈍った神剣を右腕で受ける。

綺麗に切断された右腕に構わず、気功を込めた正拳突きを小竜姫様に叩きつけた。

「きゃああああああ」

「まだ! 発動、苦無影分身! 行け!」

消失して残ったオリジナルの苦無を、再度複数に増加させて小竜姫様に投擲した。

「ふう、止血しないとな……」

「マスター、私から一つ、貴方に言いたい事があるのですが……」

落ちた右腕をつけて、僕にヒーリングするハルピユイア。

心なしか頭に角が見える。

「聞きません」

「子供ですか!？」

「聞きません」

「このマスターは……とにかく、無茶な真似は止めてくださいね。無駄にハラハラさせないでください」

「……悪かったね。つい熱くなっちゃって」

「わかってますよ。そう言う人なのは……マスターの歴史を知ってるんですから。これはただの愚痴です」

耳が痛いなあ。気をつけないと。

「うう……まさか私が負けるとは」

「小竜姫様、有り難う御座いました。お陰で自分の危うさと、未熟さを悟る事が出来ました。これからよろしくお願いします」

きよとんとする小竜姫様。

そりゃあそうだよね。

人間に負けたと思ったら、礼を言われてるんだから。

「私個人としては、もう少し手を抜いてくださると良かったのですが。まあ、武神ですものね。あまり手を抜かれると矜持にかかわりますしね。

マスターが不足を自覚出来たのです。これも試練にしてくださいましたのでしょう? 有り難う御座います」

ハルピユイアもすぐに、僕に便乗してくる。

「え、ええ……時間はまだまだ沢山あります。今日はこの辺にしておきましょう。ヒーリング……はハルピユイアさんがいるから大丈夫そうですね。じゃあ、脱衣場の裏に温泉がありますから、そこで疲れを癒やして下さい。私はこの後の準備もあるので、先に戻りますね」

言つや否や、小竜姫様は先に戻ってしまった。

「悪い事したなあ」

「流石に純粋な神族の小竜姫が相手だと、罪悪感がありますね」

ハルピユイアと顔を見合わせる。

「どうする？」

「マスターにお任せしますよ」

つまり、思いは一緒か。

なんか、ついてそうそうこんなイレギュラーな事ばかりでいいのかなあ？

長い付き合いになるんだし、フォローしとかないとな。

ハルピユイアの事を見ながら、人知れず溜め息をついた。

第三章、世界は僕に牙をむく(そのいち)

今日、信じられない事が起きた。
それは朝まで振り返る。

「動きが甘いですよ！ はあ！」

「だああ！ 人外の動きなんて真似できるか！ 拳技、短勁！」

それ、剣二本を同時に振ってるんじゃないの？ って位にほぼ同時に見える神速の剣戟を、拳に込めた気を爆発させる事で距離をとって回避する。

「その神族の剣を！ 一太刀も浴びずに！ いなし続けるのは！ 何処の人外認定ですか！」

「いや！ だつて！ 当たったら死んじゃうし！ だあ！ だから無理だつて！ 物理的に籠手と神剣の鏢迫り合いとか有り得ないから！ 脚技、スピリアタック！」

肩で息をしながら距離を取り、そろそろなんとかしないと命がダイングだな、と悟り体内の気を高める。

「む、やる気になりましたね。ですが私も毎回毎回毎回毎回毎回毎回毎回毎回やられてばかりじゃありませんよ！ 目にももの見せてあげます！」

「小竜姫、日本語が不自由な人になってますよ。それに、前口上は結構ですが、まだマスターに一太刀も入れた事ありませんよね？」

僕の前で構える小竜姫様の神剣が、脱力したようにその切っ先を

落とす。

「ハルピユイアさん。それは言わないで下さい。武神としての誇りを取り戻す為、私はなんとしても篠宮さんを越えなくてはならないのです」

熱くなってるなあ。

僕としては程々にしてほしいんだけど……。

「さあ、行きますよ！ はあああああ！」

「えっ！？ ちょっ！？ 移り変わり早！ 仕方ない、トラップカード発動！」

小竜姫様のテンションに突いていけなかった僕は、なんの工夫もなく突撃してくる小竜姫様に対して、事前に準備していたトラップカードを発動させるしかなかった。

「ひゃっ！ キヤアアアアアア！」

「……落とし穴、ですか」

「いや、本当は鬼門でも埋めてみようかと思っただけ……」

ハルピユイアと穴を覗き込む。

見えないなあ。鬼門用だから深く掘りすぎたな。

「コホン！ まあ、とりあえず、マスターの勝ちい」

「待って下さい！ 異議あり！ です！」

「おわあ！ お化け！」

「誰がお化けですか！」

穴から飛び出してきた小竜姫様は、不満ありありな様子だった。

「……面倒くさい。埋めればよかったか？」

「マスター、声に出てますよ」

小竜姫様はこれでなかなか負けず嫌いだ。

だから、試合で勝った後のこの説得にも骨が折れる。

「何が不満なんですか？」

「何って、こんな、落とし穴なんて卑怯です！」

「ふむ、じゃあ、小竜姫様は魔族や害悪となる敵が、正々堂々と正面から向かってくるとお思いですか？」

「いや、それは……」

「そうですね。小竜姫様はそのような卑怯な手段への免疫が無さ過ぎます。」

格下ならば、その類い希なる剣技で相手を成敗出来るでしょう。

しかし、今みたいな技術が均衡、もしくは劣勢の場合は？ 容易く不意を突かれるでしょうね」

「……………」

「僕の勝ちです。いいですね」

「……はい。私、一寸休みますね」

とぼとぼと自室に歩いていく小竜姫様。

お昼を奮発しよう。そう思いながら、最早日常となった朝稽古を終える僕等だった。

初日に小竜姫様をのしてから、毎朝小竜姫様の手合わせにつきあわされている。

余程悔しかったんだろう。

常に神剣装備で、闘気全開で切りかかってくる為つい毎回打ち倒してしまう。

その後、落ち込んで昼まで姿を見せない小竜姫様を、食べ物匂いで誘い出すのだ。

「まるで天の岩戸ですね」

「……まあね」

と、言う訳で今は昼食の仕込み中。

「次はどうやって断りましょうか？」

「そうだねえ。腹痛、頭痛に体調不良と思いつく事は全部やったしなあ」

これは小竜姫様が毎回誘ってくる、シャドウを出す方円の修行の事だ。

これを受けると、僕が竜種である事がバレてしまうからどうしてもやる訳にはいかないのだ。

「何かイベントでも起こりませんかねえ」

「いいねえ、妙神山全体が巻き込まれるようなのがいいねえ」

ん？ これって何かのフラグ？

「――大変だあ！」

「小竜姫様！！！」

「うわあ、鬼門の二人が障子を破壊しながら、小竜姫様を探してキッチンに飛び込んで来たあ」

「マスター、説明口調にも程があります」

目が泳ぎながら、ドタバタとキッチンを駆け回る鬼門達をウルサイので黙らせる。

「……静馬よ、痛いではないか」

「誇りが立つ。小竜姫様はお部屋にこもってるよ。騒ぐならそっちに行ってくれ」

「いや、静馬でも構わん。来てくれ、緊急事態なのだ！」

僕の腕を左右から掴む鬼門達。

「一寸、何この宇宙人連行のポーズ」

「では、私は小竜姫さんと呼んできますね」

「ハルピユイア殿、頼みます」

それにしても鬼門がここまで慌てるなんて、何があったんだろうか。

道場破り？ 魔族でもきた？

そして、鬼門（顔）に移動した前にいたのは、籠に入れられた赤ん坊の姿だった。

「静馬、我等はどうすればいい？」

「動転しすぎ。まずは小竜姫様の指示を仰ぐべきだろうね。まあ、ハルピユイアが小竜姫様を呼びに行ってるからそれまで……って、話は最後まで聞こうよ」

鬼門は僕の言葉を最後まで聞かずに二人揃っていなくなる。

困ったからって……門番しろよ。

「でも、鬼門が全く気付かなかった所を見ると、何処から転移して来たんじゃないかと思うけど……」

眠り続ける赤子を見る。

抱き上げてみる。

泣き声一つあげずに眠り続ける。

「この子、この後はここ（妙神山）で暮らす事になるのかな？ いや、ヒヤクメに時空間の測定をさせるか？」

原作内の妙神山修行場にその子はいなかった……映らなかったけど。

それにしても可愛いなあ。

ドスンドスンと足音が近づいてくる。

鬼門とハルピユイアが小竜姫様を連れてきたか。

「かごの中に……ん？ 底に何かあるな」

両手で赤子を抱き上げている為、手に取る事が出来ない。

僕の直感が騒ぐ。僕は必ずあれを手にしないとイケない気がする。

「マスター、その子が鬼門さんが騒いでいた子供ですか？」

「静馬！ 不用意に触ると爆発するかもしれんぞ！」

「しないよ……馬鹿か？ ハルピユイア、丁度いい所に来た。この子一寸抱いててくれる？」

僕はハルピユイアに抱いていた赤子を手渡す。

「あら、可愛い！ 私にも抱かせて下さい」

「小竜姫様、その赤子……爆発しますよ」

ハルピユイアに手渡した赤子に、遅れてきた小竜姫様も虜になる。

「静馬よ、何をしているのだ？」

「ん。一寸気になる事があってね」

鬼門（どっちの鬼門かはわからないけど）が、ゆりかごに手を出す僕に声をかける。

そして僕が手にしたのは、赤く汚れた布だった。

「布？ 随分汚れてるけど……」
「まるでバンダナですね」

バンダナ？ 赤い……妙神山に現れた赤子……？

「男の子ですね。本当に可愛いですね。捨て子ならここ（妙神山）で育てましょうか？」

「小竜姫さんよくわかりますね。私には性別なんてわかりませんでした」

男？ バンダナをつけた……この世界で僕に干渉しうる……まさか！ 横島忠夫か！

「マスター！ 体が！」

「――篠宮さん！！」

「なんだ！？ これは……体が、消える！？」

手にしたバンダナを中心に、原子分解を起こしたかのように粒子になる僕の体。

これは止める術が思いつかない。加速度的に進む崩壊に抑える手段は思いつかない。

きっかけはこの子、恐らくは横島忠夫のバンダナなんだろうが……でも、なんでこの時代に赤子の横島忠夫がいるんだ？

10年前の世界に来た筈だから、横島忠夫は6〜7歳の筈。歴史が変わった？

何故？ いや、歴史は正常に流れている。
なら原因は僕だ。

何処が悪かった？ ハーピーを召喚獣とした事か？ シロと横島
忠夫の接点を断った事か？ 小竜姫様をへこませた事か？

わからない。考えれば考える程に全てが悪かったような気がする。
くる。

わかるのは最早手のうちようが無い事だけ。

「くっ！！ ハルピユイア、後は任せた！」

そして僕はこの世界から消えた。

第三章、世界は僕に牙をむく(そのに)

その場所は妙神山。

そこには僕、静馬篠宮、それに僕の召喚獣、つむじ風の精霊ハルピユイア。妙神山修行場の管理人、竜神小竜姫、その門番鬼門。

そしてその場所には、先日妙神山修行場の門に捨てられた一人の赤子がいた。

「マスター、忠夫さんが泣いてます!」

「お腹空いたのか! トイレか! お風呂か! わからーん!」

「わ、私はお乳は出ませんよ! や、止めてください……ふわあ……

…篠宮さん、助けてくださいーい。ふえーん」

「神族が赤子の世話で泣くな! 鬼門! 忠夫ちゃんが泣くから部屋に来るなって言っただろう! え? 修行者? 追い返せ! 小竜姫様がこんな状態で修行なんて出来るか!」

「しかし、小竜姫様の修行を希望する人間達だぞ」

「だからよく見る! こんな小竜姫様を人前にだせるか!」

「ふえーん、止めてくださいーい」

「……わかった。右の、行こう」

「……ああ……お痛ましや」

号泣の小竜姫様、基本僕に丸投げのハルピユイア、いるだけで泣かれる鬼門、姿を表さない猿。

そして、育児の経験もないのに、人間だからと言う理由で統括させられる僕。

小竜姫様に抱きつきながら泣きわめいている赤子、横島忠夫を見ながら、平穩を感じながらもため息が止まらなかった。

これは僕があのに起こると思った理想の世界。

しかし、僕は消え、既に起こり得ないものとなっている。

「これは虚像だ……貴方は僕に何を見せようとしてる？」

僅かに感じる何者かの気配に対して問いかける。

場面は暗転する。

崩壊した妙神山。

傷だらけで倒れた小竜姫様を抱き上げる僕。

「小竜姫様！ しっかりして下さい！ 小竜姫様！」

「し、篠宮さん……皆さんは……」

自らの体ではなく、奥の異空間に避難した仲間達の安否を気にする小竜姫様。

「皆、無事です。小竜姫様が時間を稼いでくれたお陰です」

「そうですか……それは良かったです。篠宮さんが来たんです。後は貴方に任せさせてもらってもいいですか？」

力無く笑いながら、私も力になれた。と呟く小竜姫様。

様々な妨害にあい、妙神山に来るのが遅れた事を後悔しながらただ是、と答える。

「じゃあ、安心ですね。私は少しだけ眠りますね……あ……とは……
……お願い……い、します……」

掴んだ手から力が抜ける。そして、小竜姫様は静かに目を閉じる。

「待っていて下さいね。僕は貴女と同じ場所には行けないけれど、貴女に仇なす全ての愚者は僕が深い闇の底に叩き落としてみせますから」

静かに小竜姫様を寝かせると、僕は吉備津刀とカリバーンを手にすると魔族の大群に突撃した。

なんだ、これは……。

更に舞台は暗転する。

蠅の王、ベルゼブブ。

その大量の群体に僕はかかりきりで、フェンリルとなった犬飼を止める事は出来ない。

「皆、逃げるんだ！ 儀式も失敗した君達に扱える相手じゃない！」
「俺達が逃げて、そしたら町の人達はどうなる？」
「……死ぬでしょうね」

僕の言葉を受けて、口に出した横島の言葉に美神令子が答える。

「こええけど、そんな状況で引ける訳ないだろう！」
「格好良すぎる！ 何か変な物でも食べたのでは？」
「しかし、横島の言う通りじゃ！ 今以上に理想的な人員を集めるのは不可能、やるしかないじゃろう！」

横島の言葉に驚くおキヌちゃんに、同意するカオス。

「……しかし！！」
「静馬君……私達にだって一流のプライドがある。横島君の言う通りにするのは癪だけど、ここは私達がやらなくちゃいけないでしょう」

気合いを入れる美神令子。

一致団結してフェンリルに挑む横島達一行。

結果は……駄目だった。

可能な限り早くベルゼブブを殲滅した僕が見た物は、魂までも引き裂かれて息のない仲間達の姿だった。

場面はいくつも変わる。

成功してしまったおキヌちゃんの横島殺害。

アシユタロスに力及ばず敗れる神・人の混成部隊。

GS試験の際に資格も取れずに敗北し、GSになる事なくアシユタロス戦役に突入する横島忠夫。

どの未来も、決して横島忠夫は救われない。

ほんの少し、歴史の枝葉が変わっただけで、その未来は絶望に彩られたものとなる。

そして、その変わった未来は……。

「僕がその場にいた……それがこの結果か」

「そうだ。お前が干渉した未来は、その全てが今見たような世界を破壊する要因となる」

先程から感じていた気配が濃厚になる。

「……魔人皇ヨコシマ、ですね」

「そうだ。俺は横島であり横島ではない。全ての存在の先にあるもの」

御大自らお出ましとは……本格的に僕をこの世界から消すつもりか。

「それで、害悪となる存在である僕を貴方はどうするつもりか？」
「そこに言葉が必要か？ 俺は横島忠夫と言う存在が、俺へと至らないようにする為、その要因を全て排除するだけだ」

闇が形を取り始める。

そして、額には赤いバンダナをつけた黒い外套につつまれた青年の姿があった。

僕では相手にならないだろう。

それに、これだけの結果を見せられては、自らの存在意義すら疑問に思ってしまう。

「俺が見た未来は全て絶望に彩られていたが、これからは違つかもしれん。

ひょっとしたら、たった一つの真理に辿りつけるかもしれない。

この絶妙なバランスで成り立っている、終わりかけた世界で力を示せば、お前と言う存在が世界に認められるかもしれない。

全ては俺の主観からお前を消そうとしているだけだ。

異界からの戦士よ。剣を取れ。ただ死ねとは言わん。最後まで抵抗してみせろ」

ヨコシマの言葉は全てその通りだ。

しかし、見た感じ世界に、神々に愛されたヨコシマという存在がいるの以上、僕と言う存在は必要無いんじゃないかと思う。

「でも、まあ、ここで終わるのは、神の戦士として一寸癪だよね。

この空間って、召喚術は使えるのかな？」

「勿論だ。ここは俺が作り出した無の空間だ。俺もお前も、100%力を振るえる」

それは好都合。どうやら彼は、本当に僕に力を示させようとしているみたいだ。

契約の楔は、時空間の流れで切れたりしない。

ハルピュイアとカラスの召喚獣、クロウ。狼の召喚獣、ミリアを召喚する。

「マスター！ 一体何が！？ と、これは……？」

喚ばれてすぐ、僕に突っかかってきたハルピュイアも、すぐに周囲の状況を確認し始める。

「召喚獣、行使、同期」

全ての召喚獣に僕の記憶を流す。

「これは……やるしかないでしょう。ねえ、先輩方？」

クロウとミリアに同意を求めるハルピュイア。

言葉にはせずに同意を示す二匹。

クロウとミリアは生前行使していた召喚獣。

創造神ブラフマー様との契約の際に、世界と一緒に切り離されてしまった。

だから、今、僕が呼び出せるのは、彼等の影のようなものだ。

その事が時々寂しいと思う事があるけど、自分が選んだ事。

後悔はしない。

「まあ、勝てないだろうけど、せめて一矢報いようと思ってね」
「わかりました。マスター、指示を……」

Fateのアーチャーの着用していたマント、赤原外套を投影する。

「作戦は一つ。全力全開！ 全ての力を解放する！ 持てる力を全て駆使して眼前の敵を殲滅せよ！」

僕もその手に愛刀、吉備津刀、カリバーンを呼び出す。

「準備出来たか？ 最高神の認めるその力、見せてもらおうか？」
「後悔するよ？ 僕は亡霊の旅人、神の戦士……さあ行くよ、世界に愛された人を越えて、神を越えし者よ。文殊のストックは充分か？」

僕は手にした吉備津刀を、魔人皇ヨコシマに向けた。

「ミリア、行使、早駈！ クロウ、行使、雷撃！」

召喚獣に指示を出して、僕は幻想で出来た王の財宝を解放する。

「発動、王の財宝！」
ゲートオブファンタズム

僕の宝庫には、突き刺されたランクの高い武器がない。

ダークが主だった獲物だ。だけどそれでも、中級神魔に傷を与える事が出来る位の神聖はある。

多少の足止め位は出来るだろう。

「行きますよ……フェザーブレッド！」

僕のダークに紛れて、ハルピユイアのフェザーブレッドが的確にヨコシマに迫る。

「ふむ。様子見にしてもランクが低すぎるな。期待していたのだが……この程度か」

クロウの雷撃やダーク、フェザーブレッドを受けても顔色一つ変えない。

ヨコシマが一払いするだけで、それは衝撃波になり彼に迫る全ての事象はかき消された。

「なんて事……微々たるダメージすら、受けていないと言うのですよ
ようか？」

「いや、ダメージは通っているだろうね。ただ、低すぎるんだろう」

蚊に刺されても、刺されてすぐは人にはわからない。そんな感じか？

でも、蚊だつて後から痒みを感じさせたりする。

微々たる物であつても、無駄じゃない！

「クロウ、行使。電磁砲！ ミリア、行使。無駄なしの銃！」フェイルノート

クロウはエネルギーを溜め、口唇から圧縮された電流を放つ。

ミリアはその姿を変え、一丁の短銃となる。刀を消し、僕の手に宿る。

「発動、装填、真・超電磁砲」ハイレールガン

風と稲妻の宿つた弾丸。絶え間なくダークを降らせながら狙いを付ける。

「ほう……召喚獣を宝具とするか。なかなか面白いな。宝具級の威力を持つ召喚獣も大したものだが、この馬鹿の一つ覚えのような剣だけは無駄だな」

「そつでもないよ。ダークだつて無駄じゃない……発動、壊れた破ブローケンファンタズム
壊！」

降り注ぐ全てのダークが、質量を持つて爆発を起こす。

そして、その隙を逃さず、僕は無駄なしの銃の引き金を引く。

「発動、無駄なしの銃」フェイルノート

超電磁砲に渦巻く風の力をブレンドして、数倍の威力を持つ真・超電磁砲。

確かに直撃を確認した。

「追隨します。フェザーブレード！」

ハルピユアが先程とは違い、複数のフェザーブレードを放つ。

様々な方向へ放たれたフェザーブレードは、空中で方向を変え、と全てがヨコシマに直撃する。

「……どうですか!？」

「……駄目か」

真・超電磁砲から巻き起こったエネルギーの余波が消えると、全くその場から動いていないヨコシマの姿がそこにあった。

「大したものだよ、全く。これだけの力があるならば、人界で力を抑えられたアシユタロスならば、倒せるかもしれないな」

「その遙か上に自らがいる……と」

「無論。俺は全ての存在の頂点に立つものだ」

ヨコシマが、その手をこちらに向ける。

「くっ!？ 全員、全力で回避！」

皆に指示を出し、僕は全力で横っ飛び。

目視出来ない速度で、何かが今まで自分のいた場所を襲った。

「ハルピユア、見えたか？」

「魔力弾なのはわかりましたが……早すぎます」

「どうした？ この程度も対処出来ないのか？」

次々放たれる魔力弾。

直感と、向けられた手の位置だけで回避する為、とても反撃につる暇がない。

「クロウ！ くっ！ 駄目か……はっ！ 避けきれない……発動、
ドラゴンハート竜炉心、竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）！」

撃ち抜かれて消失したクロウに気にとられ、回避が遅れた僕は竜の因子である竜炉心から、風の守りを発動させる。

「ぐあ！ 貫通だつて……そんな、僕の竜の羽ばたきが」

張られた風の守り等全くないかのように、ヨコシマの魔力弾はその守りを突き破り、僕の右腕を吹き飛ばした。

「マスター！？」

「大丈夫！ あの魔力弾を止めなきゃ……発動、約束された勝利の剣（吉備津天地刀）……！」

痛みを耐えながら、左手のみで吉備津刀の真名を解放する。

ヨコシマに光が降り注ぎ、一時的にその魔力弾の連射が止まる。

「傷の手当てを……」

「ハルピユイア、落ち着いて。そんな時間はないよ。それよりも、手を貸して。あれをやるよ」

それだけで、ハルピュイアにもわかっただろう。

「しかし、それではマスターが……」

何か言い掛けたみたいだが、言葉を収める。

「わかりました。マスター、次の指示を」

「召喚、クロウ、ミア。二人共、少しの間時間を稼いでくれ」

召喚獣は死なない。やられても、エネルギー体なのでマスターの中に戻るだけだ。

そして、魔力さえあれば何度でも再召喚可能なのだ。

「ハルピュイアは、僕と一緒に宝具発動に力を貸してもらおう」

「わかりました。我が儘なマスターを持つと、私達も大変です」

ハルピュイアの嫌みに、苦笑しながら再度ヨコシマと相対する。

「神の戦士よ、もういいのか？」

「ああ、今から僕に出来る限りの最奥を見せてあげるよ」

「今まででも、充分上級神魔を滅せるだけの力はある。楽しみだ」

幾度やられても、何度となく召喚され猛攻をしかけるクロウとミア。
ミア。

それを見ながら、僕は世界に働きかける言葉を紡ぐ。

「我は創造せん、共に有る世界を」

ヨコシマは、やはり余裕があるようで、僕の言葉を楽しそうに聞いている。

「繋がらん、夢想せし心象の奇跡を」

今までが全く通用しなかったのだ。これでもやはり不安はある。

「失われし数ある絶望、力無き忘却の記憶よ」

しかし、最早僕には他に打つ手はない。

「我と我等全ての根源となる無限へ。

悲しみと慈しみの共存する慈愛の歌」

ヨコシマ……横島忠夫の最後。

それは最早変える事の出来ない終着点なんだろうか？

「今救おう、我等と汝等の有らぬ悲しみを」

何か足りない……彼等を救うには、ただ蛍の魔族ルシオラを救ったり、アシユタロス等から世界を救うだけでは駄目なんだ。

僕は間違えてしまった。

彼の周囲の環境を変える。それじゃあ駄目なんだ。

それがわかったからこそ、僕は今簡単に引く事は出来ない。だから……。

「世界は、僕と、僕等全てが等しく有る為に……力無き弱者の歌！」

瞬間、世界は姿を変える。

それは、僕の中にある失われた懐かしい風の吹く草原に。

「俺の世界を打ち消す……いや、塗り替えたのか。魔術だったか……人間……元人間にそんな事が出来るとはな」
「ハルピユイア、いいかい？」

敢えてヨコシマを見ない。

そのあり方を知ってしまえばきっと、彼に剣を向ける事は出来な
いから。

「ーはい、いつでも」

ハルピユイアが周囲の風を集め、僕の持つ吉備津刀とカリバーン
に注ぎ込む。

片手なので、指の間に挟むように二本の刀を手にする。

その全ての力を混じり合わせ、解放された世界にすら力を干渉す
る。

「ふむ、凄まじい力だ。彼の槍にすら迫るランクの力だ」

「余裕……か。しかし、持てる力の全て、受け取ってもらおうよ……
発動、竜の殺息！」ドラゴンブレス

僕は、光の奔流に吞まれそうになりながらも、その溢れる力をヨコシマに撃ち込んだ。

消える僕の固有結界「力無き弱者の歌」。

流石に魔力不足で座り込む僕。

しかし、これだけでは足りない。

そう感じる。

ヨコシマの周囲で純白の羽が舞う。

「やはりレジストしてるか……ハルピユイア、僕をヨコシマの所へ」

「マスター！？ 無茶です！！」

聞く耳持たずに、僕は気術と魔力を合わせ黒く輝く大剣を造りだす。

「マスター……はあ、私は三國一のマスター孝行の守護者ですよ。騒ぎなさい、そよ風よ」

僕の体は風によって浮かび上がり、ヨコシマ目掛けて吹き飛ばされる。

「魔人皇ヨコシマ！ フレモチウルチカラヲマフセマシワリンこれが僕の100%中の100%だあ！ 発動、天術、柔剛相交！」

更に干渉する純白の羽を掻き消すヨコシマに、神をも滅する討神の刀「早風」で斬りつけた。

「これ以上は無理だ！ クロウ、ミリア、お疲れ様。痛かっただろ
う」

「……どうでしょうか？ 魔人皇は……」

「いやいや、本気で大したものだ。まさかここまでやるとは……」

声と共に光が僕を貫いた。

「がはっ！ ヨコシマ……」

「マスター！？」

「まさか、文殊を消費するとは思わなかったぞ。

経験と修行を積み、最高指導者に迫るかもしれないな。

だからこそ残念だ。ここで、こんな手段をとらなければならない
事が」

やはり駄目か。彼の考えも、世界にも選ばれる事はなかったよう
だ。

出来るだけの事はやった。それでも無理なら仕方ない。

彼はこうやって、世界に干渉を続ける全てと戦いながら、絶望を
感じていくのだろう。

僕は、魔人皇ヨコシマを見ながら彼に憐れみを感じてならなかつ

た。

そして、僕はこの空間からもその姿を消した。

第四章、お帰りなさい。そして、いつてらっしゃい（前書き）

これからまた忙しくなるのは確定的なのですが、不定期でも再開しようと思います。

待っていてくれた方がもしいたら感謝感激、恐悦至極に御座います。

一寸だけ女神転生系・FF11系のネタ（技やモンスター）が入って行きますので、それでもいいよ。という心の広い方、どうぞごゆるりとお楽しみ下さい。

第四章、お帰りなさい。そして、いつてらっしゃい

「おお、シズマ君。死んでしまふとは情けない」

顔に何かかけられている。

今の声からすると、我が主であり、有り得ないくらい我が儘な幼女である創造神ブラフマー様みたいだ。

きつと白い布だろうな。頭に三角の布もつけられてるかもな。

「む、誰があやしいおんなと書いて妖女だって？ そんな事いつちやう悪い子にはこうだよ！ これはメラゾーマじゃない……」

妖女じゃないし！ ホワイトロリータ的な幼女だし！

しかも、その言葉から続くのは……！？

「ちょ！ 一寸ま……!!」

「メラだ！ って、動いちゃ駄目だよ！」

回避行動を取ろうとした僕が目にしたのは、一寸した隕石よりもデカい炎の塊が迫る所だった。

「ぐああああああ！！」

「ああーシズマ君ごめん！」

こうして僕の冒険は終わった。

「うっ……シズマくん……足が痺れたよう」

「駄目です！ 偶には反省して下さい！ いつもいつも漫画のネタばかりやってばかりで……僕がどれだけ苦労してるか」

いつもの事なんだけど、ブラフマーに反省を促しながら現状把握につとめる。

確か、妙神山で赤子の姿の横島忠夫に出会った事で、魔人皇ヨコシマと相対した。

そして、力及ばず世界から消えたんだ。

今回は失敗か……残念だな。

世界との取り決めで、失敗した世界に戻る事は出来ないし、得た技術を返す事も出来ない。

僕が不甲斐ないばかりに、ハルピユイアをGS美神の世界から切り離してしまった。

はあ、なんて言って謝ろう……。

「シズマくん。もう勘弁してよお。悪気はなかったんだよー」

「……もついいですよ。ブラフマー様、ただいま帰りました。まず何をすれば？」

正座を崩して痺れた足を押さえていたブラフマー様が、僕の言葉にぐるん！と顔を向けてくる。

「お土産！ 土産話だよシズマ君！！ 早く、さあ早く聞かせて、今すぐ、それすぐ、速攻で！」

「……ブラフマー様、テンション高すぎでしょう」

元気になったブラフマー様が、僕の経験を閲覧する。

さて、なんて言われるやら……。

「……シズマ君。契約したハーピーちゃんは喚べる？」

「え……はい、大丈夫だと思いますが……行使！ 召喚、ハルピュイア！」

無の空間に風が収束して、今一番会いたくなかった存在、旋風の精霊ハルピュイアが召喚される。

「ここは……マスター！？ ご無事ですか！ お怪我は！ っと……ここ……は……確かマスターの記憶だと、マスターの主様のブラフマー様の世界ですね。ならば、やはりマスターは死んでしまったのですね……」

僕の姿を見つけて、掴みかからんばかりに迫ってきたハルピュイア。

そして僕が外傷ないのがわかると、周囲を見回して状況を把握したように落ち込みを見せる。

「ごめん、ハルピユイア。僕に力が足りなかったばかりに、君を神界だけでなく、世界からも隔てさせてしまった」

「……マスター」

「僕は間違えてしまった。世界の鍵である横島忠夫を守らんばかりに、彼本人に対する配慮を忘れていた。結果、僕がいる。という事象自体が世界を滅ぼす原因となってしまったんだ」

今更わかってても既に手遅れなんだけどね。

帰る場所も既がない。僕の召喚獣として存在が確定してしまった今、僕はハルピユイアに謝る事しか出来ない。

「マスター、何か勘違いしてませんか？」

「ハルピユイア？」

「始まりこそは違えど、私はマスター、シズマ「ライズ」という存在と、共に在りたいと感じたからこそ主従契約を結んだのです。マスターは一時的に動く駒として私を使うつもりだったのですか？」

なっ！？ そんな馬鹿な！！ 僕はハーピーをハルピユイアに戻して神界に返してあげようとは思ってたけど、決して半端な気持ちじゃない！

「まあ、そうじゃない事はわかってますが……だからこそ、そんな事で謝らないで下さい。私はいつまでもマスターと共にあるつもりです」

「ハルピユイア……有難う。これからも宜しく」

「はい！ 勿論です！」

よかった。ハルピユイアは僕を受け入れてくれた。それだけが気がかりだった。

「良かったね、シズマ君。羨ましい位の仲の良さだね」

「はい。無念さはありますが、これで一応の心残りは有りません」
「マスター、この方が？」

僕の記憶があるから、あくまでも確認だろうけど。

そう言えば自己紹介してなかったな。

ブラフマー様も知ってるだろうけど、双方に相手を紹介する。

「ブラフマー様ですか。私のような若輩者、お目通し叶っただけでも光栄です」

「気にしなくていいよ。シズマ君の家族なら、私の家族だからね」

なんか二人とも仲良いな。

女性同士？ だから何か感じ合うものがあるのかな？

「さて、シズマ君。私は今とても機嫌が悪いの」

「いや、とてもそうには見えませんが……」

「ブラフマー様、お紅茶のおかわりは如何ですか？」

「あ、飲む飲むー。戸棚に入ってる栗どらも出してー」

唐突に不機嫌と言うブラフマー様。

しかし、給仕さんよろしく紅茶を振る舞うハルピユイアに、即座に上機嫌になる。

「もぐもぐ……ぷはぁ！ でね、私は今回あの世界の神々の打診を受けて、シズマ君を送り出したんだ。それなのにあの新米破壊神は……これじゃあ、私の沽券にかかわるんだよ！」

神様には神様のルールがあるんだなあ。

「と、いう訳でシズマ君には、私の力の一部を継承してもらおうよ」

……はい？

「なにを……」

「魔人皇ヨコシマに勝たないと、あの世界には行けないからね。今のシズマ君なら多分受けられると思うから、頑張ってね」

「一寸！ 待っ……がああああああ！！」

言った瞬間、体中にブラフマー様の力が流れ込む。

「マスター！ ブラフマー様、流石にマスターにはまだ無茶なのでは！？」

「あれ？ シズマ君頑張っつて。消えちゃうよー」

二人の声も聞こえない位にのたうち回る僕は、そのまま意識を失った。

「うっつ……シズマくーん……足が痺れたよう」

「駄目です！ 直前に言ったばかりじゃないですか！ 全くもう……反省して下さい！ いつもいつもいつも無茶ばかりやって……僕がどれだけ苦労してるか」

無事ブラフマー様の力の一部を得たらしい僕は、消滅の危機を乗り越えてまたブラフマー様に正座の刑を与えている。

「いつも、が先程より一回増えましたね」

「それにしても、僕はどうなったんだろう？」

ブラフマー様の力って何なんだろう？

何であっても、僕なんか扱いきれるとは思えないんだけど……。

「じゃあ試してみようよ！ それ！ いでよ、みどりさん！」

「わっ！ 急に立たないで下さいブラフマー様」

「いや、ハルピユイア。突っ込む所はそこじゃない！ 自分で与えた能力わかってなかったんかい！ そもそもみどりさんって……ドラゴンじゃないか！」

立ち上がったブラフマー様が指を鳴らすと、そこには巨大な深緑色の竜がそこにいた。

その威圧感は、以前別の世界で相対した竜の比ではない。

「イヤイヤ、チャントワカッテルヨ……多分。

さて、とりあえずこのドラゴンを私が与えた力だけで倒してもらおうかな」

一寸、ハルピユイアと密談。

「この竜は、以前の奴とどの位違うと思う?。」

「私の感が確かなら、10倍以上は離れてますね。分かり易く言う
と、マスターレベル99。敵ドラゴンレベル999と言った感じ
です。」

「違いすぎない? これが若さ……じゃない、人と幻想種の違いか。」

「無茶じゃないかなあ?。」

「いえ……私の考えが正しければ、恐らくは……。」

何か気付いたのか? 僕は体感で特に変わりないけど……。

「もういいかな? じゃあ、説明するね。シズマ君にはエインヘリ
アルの力を与えたんだ。簡単に言うと、凄く強い召喚術……かな。」

「召喚術? エインヘリアル……神の戦士が?。」

促されるままにクロウを召喚する。

「じゃあ、言葉でエインヘリアルを与えてみて。」

「エインヘリアルを与える? クロウに伝えればいいんですか?
クロウ……お前をエインヘリアルとする……。」

突如、黄金色に輝くクロウ。

「オーラに包まれると言うか……それだけで何十、何百……いや、
何千倍とも思える位に力を増している。」

「うん。上手く継承されたね。じゃあ、後はいつも通り指示を出し
ながら、その子を倒してみて。」

「これはまたいまだかつてないチートだね」

とりあえずクロウに指示を出して、ドラゴンへと向かわせた。

「うんうん、期待通りだね」

「そんな……馬鹿な」

「いやいや、凄まじいですね」

今、僕の目には傷だらけで倒れ伏すドラゴンと、無傷で飛び回るクロウが映っている。

「ハルピユイア、クロウの力どの位になってるの？」

「ええと、平時がレベル45ですね。エインヘリアル効果時はレベル4500です」

「なんだ、そんなものなんだ。まあ、シズマ君も慣れてないから仕方ないよね」

+10000倍でも駄目なんだ。

まあ神様の力なんだから上限があるだけ、未熟なんだろうなあ。

「この世界だから10000倍位なんだろうね。外の世界じゃあ、シズマ君の熟練にもよるけど2倍〜10倍位が限度かな？」

「後、その影響なんでしょうが、私達召喚獣の基礎性能が上がっています。大体+10程度でしょうか？」

そんな神スキル……って、実際に神のスキルな訳だけど。

いいのかな？ レベル1のスライムを召喚獣にした場合でも即座にレベル11。エインヘリアルを使用した場合は、レベル22〜110まで上がるって事が。

凄まじいな。

「有難う御座います、ブラフマー様。必ずや期待に応えて見せます」「うん、頑張つてね。じゃあ、楽しい土産話を待ってるね。行ってらっしゃーい」

そして僕等はまた、あの世界に舞い戻った。

主人公及び仲魔ステータス一覧(そのいち)

スキルの威力は、魔力及び各種ステータスにより変動する為、基礎値のみ表示する事とする。

シズマ「ラインズ」
(静馬篠宮)

レベル99

HP 784

MP 1230

力35

魔47

体31

速50

運23

固有スキル

エインヘリアル

「マスターが契約する全ての仲魔のレベルを熟練度×2」1000
アップさせる。及び、このスキルを持つマスターの召喚獣は常時レ
ベルが+10される」

竜炉心

(ドラゴンハート)

「竜族の証、竜珠。効率的に魔力及び気術を返還する。
返還効率1対100」

竜の羽ばたき

(ドラゴンウイング)

「風属性。自身及び周囲の全属性ダメージを300吸収する。」

他者、範囲を拡大するとその吸収率はダウンする」

竜の殺息

(ドラゴンブレス)

「光属性。対象に威力350の後に追加130×1〜50の魔力ダメージを与える。」

使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時のみ」

真名解放

(マスターオブドラゴン)

「自身の竜の力を解放する

使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時のみ

使用制限、対象は自身もしくは召喚獣クロウ(鴉)のみ」

格闘術

(気孔弾、コンボ、タックル、短勁、バックハンドブロー、乱撃、スピリアタック、空鳴拳、双竜脚、夢想阿修羅拳、ファイナルヘヴン)

剣術

約束された勝利の剣

（吉備津天地刀）

〔光属性。対象に威力2000の魔力ダメージを与える〕

勝利すべき黄金の剣

（カリバーン）

〔光属性。対象に威力1500の魔力ダメージを与える〕

魔術

召喚術

契約召喚獣

・クロウ（鴉）

・ミリア（ハウンドウルフ）

・ハルピュイア（旋風の精霊）

投影魔術

固有結界

「力無き弱者の歌」

〔現実を浸食する心象世界を具現化させる〕

空想具現化

（マールファンタズム）

〔自然界の物を自らの意思で変化をさせ、空想を具現化させる力〕

無駄なしの銃

(フェイルノート)

〔光属性。威力1〜120の魔力ダメージを与える。魔力で創造した銃。スキルや魔術を込める事が可能。使用制限、召喚獣ミリア媒体時のみ使用可能〕

王の財宝

(ゲートオブファンタズム)

〔異空間から自らの所有する(投影可能な)道具を出現させる〕

壊れた幻想

(ブロークンファンタズム)

〔投影した武具を爆発させる。威力(武具の神格×)5の魔力ダメージを与える〕

気術

天術

〔気術と魔術を融合させた無の力。全ての天術は、シズマライズが使用した場合に限り威力が+30される〕

柔剛相交

(ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン)

〔無属性。天術。威力400の無属性ダメージを与える。このスキルは対象の如何なる防御スキルを無効化する。〕

使用制限、早風、創造時のみ〕

早風

〔無属性。天術。天術により創り出した無の刀。威力2の無属性ダメージを与える〕

超電磁砲

（レールガン）

〔電撃属性。威力80の念動ダメージを与える〕

真・超電磁砲

（ハイレールガン）

〔電撃属性。威力120の念動ダメージを与える〕

影分身の術

〔疾風属性。自身及び自身の所有する武器を複数複製する。

分身の耐久度は1、威力は30%となる〕

召喚獣

クロウ

（鴉）

レベル45

HP122

MP35

力12

魔11

体8

速35

運3

固有スキル

突撃

〔無属性。威力5の物理ダメージを与える〕

羽ばたき

〔衝撃属性。範囲に威力10のダメージを与える〕

電磁砲

〔電撃属性。威力15の念動ダメージを与える〕

真名解放

（マスターオブドラゴン）

〔上記同様〕

ミリア

（ハウンドウルフ）

レベル13

HP83

MP44

力7

魔12

体9

速 13
運 10

固有スキル

突撃

〔無属性。威力5の物理ダメージを与える〕

体当たり

〔無属性。威力7の物理ダメージを込与える〕

ブフ

〔氷結属性。威力5の魔法ダメージ＋一定確率で氷結効果を与える〕

無駄なしの銃

（フェイルノート）

〔上記同様〕

ハルピユイア

（旋風の精霊）

レベル 27

HP 171

MP 120

力 9

魔 21

体
8

速
2
9

運
1
5

固有スキル

フェザーブレード

〔疾風属性。威力35のダメージを与える〕

羽ばたき

〔衝撃属性。範囲に威力10のダメージを与える〕

ガル

〔疾風属性。威力5の魔力ダメージを与える〕

マハガル

〔疾風属性。範囲に威力5のダメージを与える〕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9387w/>

神は哀れな子羊に慈悲を与える

2011年10月28日02時08分発行